

# 男性性の傷つきに敏感なジェンダー臨床論のために（第8回・最終回）

－「男らしさ」へのエクソダス（脱出）－

For Gender-Sensitive Clinical Approach to Wounded Masculinity

(8) An experience Analysis of a Emasculated Male : Success of Construction of Masculinity

國友万裕（同志社大学）／中村正（立命館大学）

Kazuhiro Kunitomo (Doshisha University) / Tadashi Nakamura (Ritsumeikan University)

Key words: 男性性の解放、男同士の繋がり、社会的承認

liberation of masculinity, man-to-man friendship, social approval

## 1. 課題：男性性ジェンダー論による青年の体験の考察-言葉のない問題を照らし出すこと

ジェンダー社会における女性の被抑圧的地位に由来する被害は、女性学・フェミニズムの視点から社会的に認知されているが、被害とまではいわないにしても広く男性に関わる諸困難についての認識が同じ程度になされているとはいえないし、そうした立論の必要性についてさえ懐疑的な論者もいる。男性が何らかのジェンダー関連の被害、不利益もしくは臨床的ニーズを訴えると、本人の意識や行動の特性に帰責されてしまい、社会的な問題の相において認識をすることが困難になる。問題の隠蔽・否認、自己責任化であり、強いセルフネグレクトともいえる。まとめると、何らかの困難や生きづらさを訴えられないことが、男性性ジェンダーの中心にある。そこで、男性問題の特性取り出し、ジェンダー社会における対人援助や臨床実践の裾野を広げる必要がある様相を指摘したい。そのために現在 50 歳代となったある男性の経験の人生物語の分析を行っている一連の研究である。今回は、男性性ジェンダー役割に適応できず、男であることを拒否していた時代を乗り越えて、男性としてのジェンダー自己同一性を達成するまでの過程と名付けの作業を行う。

## 2. 方法と分析：男性性研究によるエピソード分析

ある男性の 40 歳代から 50 歳代の人生経験の意味を考察する。「その 7」での分析と考察はカウンセラーや社会運動家たちとの関わりの視点から、1990 年代から 2000 年代であったのでそれに続く時期である。

それまでの男性運動は脱鎧論が中心であり、男性性によりジェンダー化された男性たちにまといつく「男らしさ」の鎧を脱がせるという作業であった。しかし、逆に男性性ジェンダーに幼少期から反発し、同一化することができなかった男性は、男性性を過度に押しつけ、男という性自認を持つことも困難を抱えていた。そこから脱出し、男性性を自分のものとするまでも様子について、以下、いくつかの詳細な出来事の中括弧にし、5 つに言語化したエピソードを取り出した。

(1) 男性性の覚醒 (失われたギャングエイジ、チャムシップ、ピアグループを体験する) 40 歳から 9 年間、専門学校で非常勤講師として勤務する。ここは大学とは異なり、学生と教師との距離が短く、細かいケアが要求される。そこで学生たちとスキンシップ的な関係で過ごしたことで、長い間、忘れていた男性性が目覚める。

(2) おっさんずフレンドシップ (マッチョな男性たちとの付き合い)

① 当時 30 歳、A さん。マッチョを自認するインテリ青年。ジェンダーにも関心あり。彼と親しくなったことで、マッチョ男性の思考パターンを初めて知り、眼から鱗の落ちる体験をする。

② 当時 20 代、B さん。おしゃれで、優しさとワイルドさを併せ持つ細マツ

チョ。B さんと川遊びなどをする中で、男同士の野性的な付き合いを初体験する。

③ 当時 30 代、C さん。元スポーツクラブのインストラクターで筋肉マッチョ。週に一度以上会うような親密な付き合いとなり、キャッチボール、スケート、海水浴など、若い男性同士のような付き合いをする。

④ 当時 50 代、D さん。社会的マッチョ。時々、会って話を聞いてもらい、これまでの人生の意味づけについて分析してもらう。

(3) 労働をめぐる社会の変化 (社会的拘束からの自由) 社会が非正規化していき、非正規雇用が受容され始めたため、非常勤講師でいることが以前ほどの引目ではなくなった。むしろ自分らしい生き方が追求できることの確認。

(4) アカデミックな世界での承認 著書を出したことで、ある程度は能力が認められることとなる。それが自信につながる。

(5) ジェンダーの捉え方の違いを知る

① 社会運動家の男性との出会いと別れ。その破天荒な生き方に学ぶものはあるものの、男性ジェンダーの捉え方が自分とは違うため、理解し合えないことを認識する。しかし、多くの争いを経験したことで自己主張ができるようになる。

② 精神分析のカウンセラーとの出会いと別れ。当時 35 歳の女性。ジェンダーの悩みを打ち明けると、彼女は困惑しきった様子で、「わからない」という言葉を連発する。ジェンダーブラインドの状態できてきた人であることを実感する。

## 3. 考察

失われた少年時代を 50 歳ぐらいになって獲得するという経験を果たす。長い苦難の道のりが続いたものの、中年を過ぎてここに辿り着けたのは、奇跡的ともいえる人生の展開であったようにも思われる。ただし、先に考察したとおり、まだ男性ジェンダーの問題を一枚岩のこととしてしか捉えていないカウンセラーや全くジェンダーブラインドなカウンセラーも存在し、それが当事者に二次被害を与えることにもなる。男性の中には「男らしさ」への囚われで他者を権力で押し付けられる者もいる一方で、「男らしさ」を内面化できずに悩む者も存在する。その部分を少なくともカウンセラーなどの援助職の人々に理解させることが、これからの男性運動の課題となると思われる。

國友万裕 「男は痛い!」『対人援助学マガジン』(連載)

中村正 「不安定な男性性と暴力」、『立命館産業社会論集』、52 巻 4 号、2017。

中村正 「妄想=暴走する男たち—ハラスメントの要の位置にある男性性ジェンダー」『臨床心理学』18 巻 5 号、pp.561-568、2018。